



# つちおと



三条市立裏館小学校 学校だより NO. 6

(槌 音)

令和元年9月2日

## 裏館小の夏休み 2学期のスタート お願い

6年生の陸上練習、夏まつり(前半)と三条学園での研修、トイレ掃除(後半)、始業式



- ・HPでも紹介しました。前半は、6年生の陸上練習。暑い中、よく頑張っていました。8月2日(金)の三条夏まつり参加も暑さが心配されましたが、何とか大丈夫でした。6年生も郷土クラブの子どもたちも本当によく頑張りました。夕方からちょっと暑さがやわらいだこともよかったようです。これが「裏館小学校の夏休み前半」でした。
- ・後半のお盆明けは、21日(水)の「三条学園 同和教育現地学習会」からスタートでした。前日から研修のあった市教研(市の小中学校教育研究会)の部会もありましたが、この日は、上越市の白山会館まで出掛けての学習会でした。同和教育の実態から、いろいろと考えさせられ、学ぶものがたくさんでした。そして、22日(木)に学校評価の全体会を行い、学校生活の改善について、たくさんの視点から建設的に意見交換をしました。それを受けて、26日(月)に子どもたちのために、全職員で児童用のトイレ掃除を行いました。子どもたちが気持ちよく学校生活を送っていくことができるようにとの対応でした。



- ・2学期の始業式の前に、4名の2年生と3年生の転入生を全校で歓迎しました。自己紹介の後、自分の学級の子が自分たちの列へ案内しました。その後2学期の始業式。1, 3, 5年生の代表が、夏休みの思い出と2学期の目標を具体的に発表しました。その後、校長が三条市の海外派遣事業で10人の小中学生と中国の重慶、巴南市、愕州市へ行って来たことと、新発田市出身の「落語家 真打 三笑亭夢丸 師匠」の話がすばらしかったことを伝えました。最後に全員で校歌を斉唱し、9月の生活目標の「挨拶の話」を松崎先生から聞いて終わりました。学校でも「挨拶運動」を進めていきます。来校された保護者の方やお客様にも元気な挨拶ができることを目標にします。ご家庭でもいい挨拶が交わされることをお願いします。

### 「学校評価アンケート(保護者編)」に関わってのお願い

- ・学校内の挨拶を向上させます。ご家庭でもいい挨拶ができるようにお願いします。
- ・子どもたちに関わる問題を「何とかいい形で解決していこう」と学校で努力しています。困った点は、お気軽にご相談ください。いろいろな情報が独り歩きしないようにご配慮願います。
- ・朝の「欠席連絡」は、連絡帳でしていただくようにお願いします。事情がある場合を除き、7:45前、18:30以降の電話連絡は控えていただくとありがたいです。お願いいたします。



## フェアプレイの心 フェアプレイでいく姿勢

野球好きの小林が今年の「夏の甲子園大会」から学んだこと

- ・履正社（大阪）に敗れたが、今大会の主演は星稜（石川）の奥川投手だろう。中でも3回戦の智弁和歌山（和歌山）戦は、延長14回タイブレークの末に星稜がサヨナラ勝ち。150キロの快速球と精密機械のコントロールで奪った三振は23個。歴史に残る名勝負だった。

### 急増したフェアプレー



- ・この試合にはもう一つの素晴らしいドラマが…。延長11回。高温と熱投による疲労から奥川投手の右足にケイレンが襲う。何とか智弁和歌山打線の攻撃をしのいだその裏の攻撃前、智弁和歌山の黒川主将から奥川に熱中症防止に効果があるという漢方薬が託された。甲子園で試合中にこんな行為は見たことがない。まさに敵に塩。そんな友情に支えられて奥川の圧巻投球は完結した。今大会を振り返った時、「フェアプレーの大会」と位置付けることができる。
- ・スタートは、2回戦に登場した花咲徳栄（埼玉）の菅原選手の意外な行動だった。7回に明石商（兵庫）の中森投手が投じた変化球が肩に当たった。判定はデッドボール。だが菅原は一塁に向かわず、「少し前かがみでよけてしまった。自分が悪い。」と球審に謝罪。そればかりか、次の投球を左翼席に叩き込んだ。この奇跡の本塁打は、野球の本場・米国でも話題を呼び「フェアプレーの象徴」として映像が流れたという。
- ・準々決勝の星稜対仙台育英（宮城）戦でも、星稜の先発、荻原吟哉投手の手首がつかけると、仙台育英の小濃選手がマウンドまで駆け寄ってスポーツドリンクを渡した。試合後、小濃選手は「相手があって野球ができています」と語り、同校を率いる須江監督も「グラウンドに敵はいない」と日頃の教育の一端を表している。



### 様々な問題を考える契機に



- ・甲子園を美談だけで飾るものではないが、令和の高校野球に貫かれるフェアプレーの精神。きっかけは春のセンバツ大会だった。この大会で準優勝に輝いた強豪・習志野と対戦した星稜・林監督は、相手のサイン盗みを疑って抗議、試合後にも習志野の控室に乗り込む騒動に発展した。この結果は嫌疑不十分として習志野におとがめはなく、騒ぎを大きくした林監督は春の2カ月間の指導自粛となった。しかし、これを契機に高校野球の原点であるフェアプレーの意義が再確認されることになった。
- ・塁上の走者が打者に球種やコースを教える紛らわしい行為は、これまでも当たり前のように繰り返されてきた。テレビ画面では、それらが、この夏からほとんど見られなくなったのは歓迎すべきことだといえるだろう。
- ・今大会では、予選レベルからサイン盗み等の行為を厳禁する通達が各都道府県高野連から出されていたという。甲子園でも、バックネット裏から大会本部員によってマナー違反がないかチェックが続けられたという。「勝ちたいがためのアンフェアなプレーはもうやめよう。高校野球からなくそう。」大会審判副委員長の窪田氏は抽選会後の監督会議でこう訴えていた。
- ・勝利至上主義からの脱却。選手ファーストの運営。時代とともに高校野球も変わっていく。甲子園に出場する強豪校の指導者で意識改革の必要性を訴える者もいる。突如、多発したかに見えるフェアプレーの甲子園だが、こうした積み重ねの上に成り立っているという。来年以降はそんな光景に驚くことなく、当たり前になっていることを願う。（インターネット記事参照）

※ 4人の転入生を迎え、465人全員で元気な2学期をつくっていきます。

学校でも、子どもたちの「フェアプレイ」を目にする機会を増やしていくように努力します。子どもたちと一緒に頑張り、汗を流す2学期にしていきます。

【 「つちおと」文責 裏館小学校長 小林徹哉 】